

序論

グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育……………秋田 茂
——日本史と世界史のあいだで——

- 一 歴史学・歴史教育の行き詰まりと教育・入試改革 2
- 二 阪大発のグローバルヒストリーの特徴・主張、歴史教育への発信 4
- 三 本書の構成と主要な論点 7

第一部 「世界」を問い直す

第一章 日本列島における漢字使用の始まりと東アジア……………市 大樹 18

- 一 漢字を使って倭語をどう書き表すのか 18
- 二 外交の場における漢字使用の開始 21
- 三 国内における漢字使用の開始 27
- 四 漢字使用の本格化へ 31
- 五 朝鮮半島からの影響 36

第二章 初期の対中国国際借款団と日本外交……………久保田裕次 44

——「国益」と資本の相互関係——

- 一 対中国国際借款団への視角 44

- 二 対中国国際借款団の誕生 46
- 三 旧四国借款団の結成 54
- 四 辛亥革命と六国借款団 60
- 五 「国益」の競合 66

第三章 世紀転換期のインド系移民排斥と「インド太平洋世界」の形成……………秋田 茂 72

- 一 「移民の世紀」と帝国の共存 72
- 二 インド系移民の拡大とその背景 74
- 三 「帝国臣民」の論理——南アフリカにおけるガンディー 80
- 四 インド・ナショナリズムと帝国日本 89
- 五 世紀転換期のインド太平洋世界 96

第四章 戦間期文化国際主義と「新渡戸宗の使徒」……………中嶋啓雄 100

- 一 国際社会の誕生 100
- 二 新渡戸宗の使徒とその活動 103
- 三 戦間期文化国際主義の生成 111
- 四 アジア・太平洋地域の文化国際主義をめぐる諸問題 114
- 五 新渡戸宗の使徒と戦後 120

第五章

日仏関係から見る世界史（一八五八年―一九四五年）……………岡田友和
― 世界市場と国際的地位をめぐって ―

127

第六章

泰緬鉄道建設をめぐる戦争記憶の比較史……………池田一人
― 日本人将兵、イギリス人捕虜、ビルマ人労務者 ―

152

- 一 日仏関係史から見る多様な帝国 127
- 二 フランスの東アジア進出と日本 130
- 三 インドシナの植民地化と日仏協約 133
- 四 第一次世界大戦期における日本軍の欧州派兵 137
- 五 日仏文化交流機関の設立 139
- 六 日仏プロバガンダ戦争 142
- 七 帝国の競合・協力・妥協 145
- 一 泰緬鉄道建設の労働力と犠牲 153
- 二 連合軍捕虜の記録と日本軍 157
- 三 労務者の記録 162
- 四 日本と欧米における泰緬鉄道の戦後 168
- 五 現代ビルマにとっての泰緬鉄道 174

第七章

バウンドする伝播のネットワーク……………向正樹
― ウマ、火薬兵器、蒙古襲来 ―

186

第二部 「時代」を問い直す

- 一 バウンドする伝播のネットワーク 186
- 二 基本的な概念 全体性からネットワークスの視点へ 188
- 三 ウマの誕生から遊牧騎馬民の出現まで 191
- 四 モンゴルと火薬兵器 195
- 五 アジアの近世帝国と火薬兵器 198
- 六 短銃騎馬軍団の登場 201
- 七 近代日本からモンゴルへ 205

第八章

琉球王国の形成と東アジア海域世界……………中村翼
……………

214

- 一 琉球・沖縄史研究から学ぶ 214
- 二 琉球王国成立前夜の琉球列島と海域交流 218
- 三 「琉球国」の誕生と港市・那覇の成立 223
- 四 琉球王国の成立と東アジア海域世界の中継地・那覇の確立 229
- 五 今後にむけて 235

第九章 東アジア「近世化」論と日本の「近世化」……………高木純一

- 一 東アジア「近世化」論とは 239
- 二 東アジア「小農社会」論をめぐる 240
- 三 日本とヨーロッパの「近世化」 245
- 四 日本の「近世化」を再検証する 254
- 五 新しい「近世化」論に向けて 261

第一〇章 生活水準の比較史……………山本千映

——イギリスと日本——

- 一 数量経済史 266
- 二 実質賃金の推計 267
- 三 徳川日本への適用 276
- 四 生活水準のさまざまな指標 283

第十一章 肉桂と徳川期日本……………岡田雅志

——モノから見るグローカルヒストリー構築へ向けて——

- 一 肉桂から見る近世アジアの市場連関と日本 292
- 二 徳川期の日本の生薬市場と肉桂 294

- 三 一八〜一九世紀のユーラシア東部における薬種交易の変容 304
- 四 日本における肉桂国産化とその背景 308
- 五 もう一つの物産複合 311

第十二章 現代東アジア諸国の少子化を歴史的に理解する……………桃木至朗

- 一 現代東アジア諸国の共通課題 318
- 二 小農社会・勤勉革命と近世化 323
- 三 「圧縮された近代」のゆくすえ 331
- 四 近世と現代の対話——一周先へ 337

編者あとがき 345

執筆者紹介 348